

原石が多く、接合の結果、原石の形状が想定できる資料（第129・131図）がある。また、剥片類の正面に自然面を残すものが多く、遺跡内でToolの素材剥片作出等の作業が活発に行われていたことが窺える。

以上、清河寺前原遺跡の環状ブロック群を概観したが、若干の整理をしておく。

環状の規模は約15mと小さいが、石器総数やToolの組成、中央部に密集度の高い石器集中を持つ点など、小形環状ブロック群の範疇で捉える事は出来ない。また、Toolの分布に偏在があまりない点、石斧を組成しない点など、多くの環状ブロック群と異なっている。それが、大宮台地の地理的特殊性なのかは不明である。

清河寺前原遺跡は、黒耀石原産地から遠隔地域

であるにも関わらず、黒耀石が多く出土している。接合資料及び、剥片類の正面に残された自然面の割合から、遺跡内で原石から剥片剥離が活発に行われていたことが窺える。

関東地域で、良質の黒耀石を集中的に利用している遺跡はあまり類例が無く、ナイフ形石器・台形様石器の特徴から中部地域を含めた広域で比較検討する必要がある。

大宮台地は当該期の遺跡が少なく、小規模である。その中で、清河寺前原遺跡の環状ブロック群は規模・石器群の内容等が突出している。現状では、資料的制約は大きいが、今後、清河寺前原遺跡と黒耀石原産地の関係、大宮台地内における清河寺前原遺跡の位置付けの2面性を検討していくなければならないと考える。

#### (4) 環状ブロック群出土の石器

清河寺前原遺跡の環状ブロック群で主体を占める石器石材は、良質の黒耀石である。

大宮台地の旧石器時代を通時にみると、遺跡ごとに黒耀石の使用に偏在が大きく、特に岩宿Ⅱ期は黒耀石を主体的に用いる遺跡と、ほとんど使われない遺跡がある。しかし、田代のI・II期、西井のI b・c期は、ガラス質黒色安山岩が多く用いられており、黒耀石は殆ど使われていない。関東地域に視野を広げると、下総台地では黒耀石を比較的多く用いられているが、殆どが高原山産黒耀石とされており、清河寺前原の黒耀石石器群とは異なっている。また、赤城山南麓は、ガラス質黒色安山岩、黒色頁岩が多用されており、黒耀石が主体遺跡は安中市古城遺跡、前橋市内堀遺跡、吉井町長根遺跡群が挙げられる程度である。

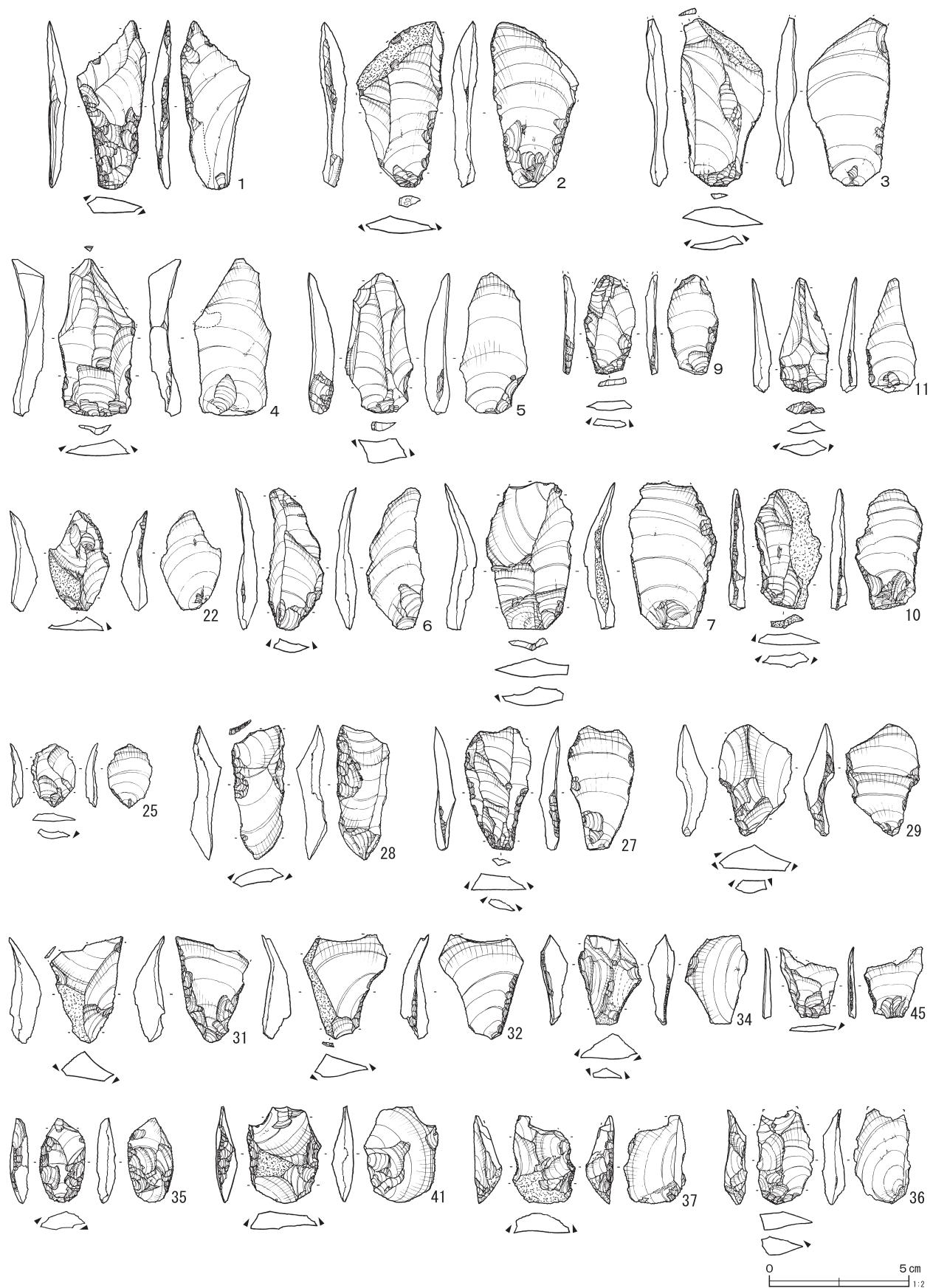
良質の黒耀石が主体的に用いられているのは、島田和高が「黒耀石利用のパイオニア期」で取り上げた、原産地遺跡の追分遺跡と消費地遺跡の野尻湖遺跡群がある。それに加え、山梨県の横針前久保遺跡と群馬県の内堀遺跡から、良好な資料が

出土している。

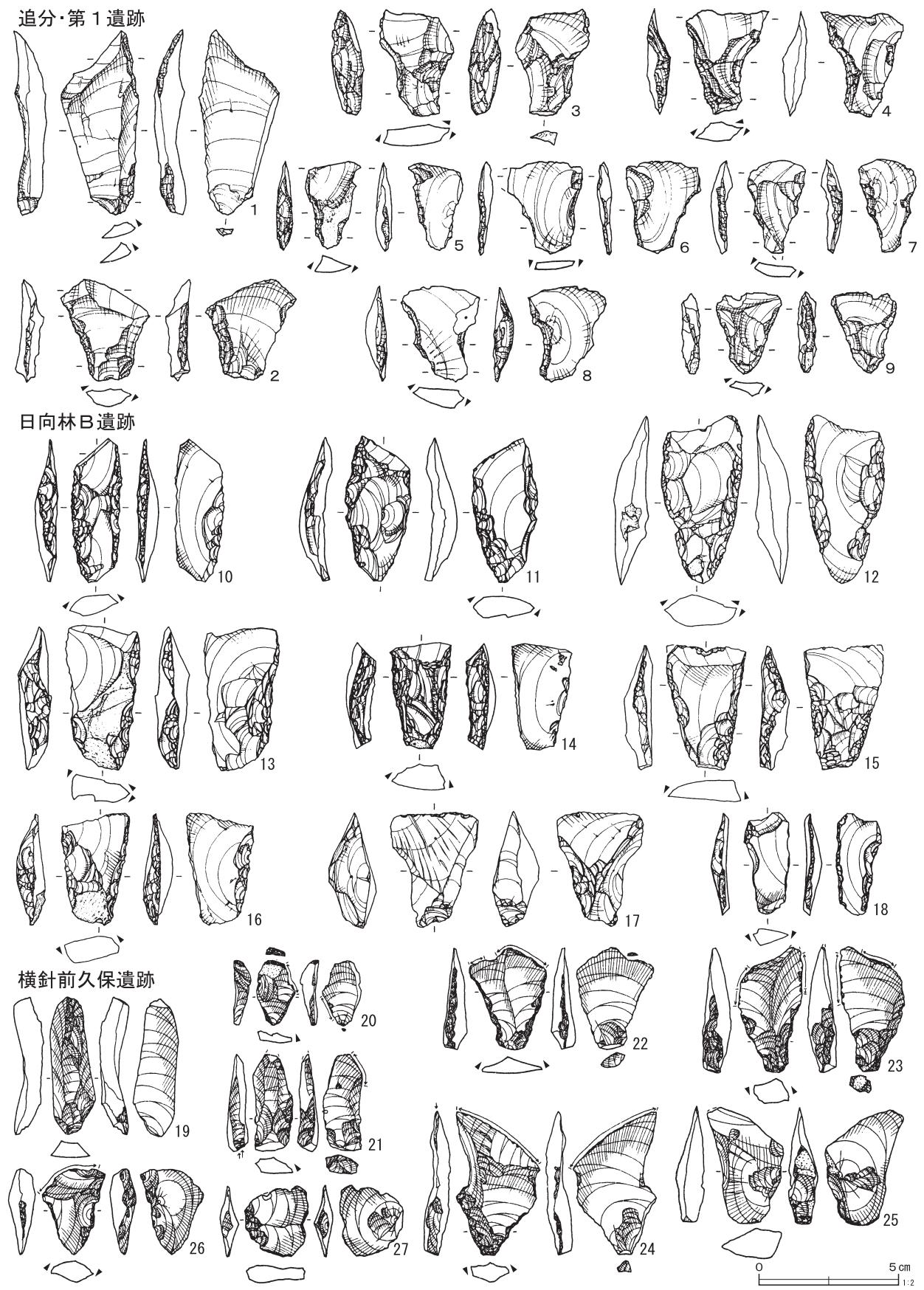
清河寺前原遺跡の黒耀石は、肉眼観察であるが、良質なものが多く信州系と思われる。今後産地分析を行い、詳しい検討を行う必要があるが、今回はナイフ形石器及び台形様石器の形態的特徴から、上記の遺跡と比較する。

清河寺前原遺跡はナイフ形石器26点、台形様石器19点の合計45点である。ナイフ形石器と台形様石器の区分は必ずしも明確ではなく、形態は漸移的に変わっており、便宜的に分類した部分がある。他の遺跡との比較の際にナイフ形石器と台形様石器をあわせて、検討して行くことにする。

ナイフ形石器・台形様石器の剥片素材は、縦長の剥片と貝殻状剥片がみられる。前者とナイフ形石器、後者と台形様石器の結びつきが強いが、台形様石器に関しては、素材剥片の用い方は多様である。ナイフ形石器と分類したものは、打面を基端面に残すものが多く、台形様石器は貝殻状剥片を、横に用いるものが含まれる。調整加工は、平坦剥離と微細剥離を主体であるが、Blunting加工



第208図 清河寺前原遺跡出土のナイフ形石器・台形様石器



第209図 関連遺跡のナイフ形石器・台形様石器

も一定量みられる。調整加工の特徴として、両側縁の加工方向が同一方向ではなく、左右回転させているもの（1・2・5・10・11・28・29・31・32・34・35）が目に付く（第208図）。

#### 追分遺跡（第209図）

長野県長和町の鷹山黒耀石原産地遺跡群内に所在する。

5枚の文化層が確認され、今回対象とするのは第5文化層である。

遺物分布は約10×20mの範囲から、石器集中5箇所検出されたが、環状ブロック群は形成していない。資料総数は936点である。器種組成は、ナイフ形石器2点と台形様石器26点、石錐、搔・削器、敲石等が出土し、石斧は出土していない。

ナイフ形石器は（第209図1）は、清河寺前原遺跡の1～3と形態が似ている。台形様石器は貝殻状剥片を横に用いたものが多く、側縁に抉るのを入れるのが特徴である。調整加工は平坦剥離と微細剥離が用いられており、左右回転させたものが多い。

#### 日向林B遺跡（第209図）

長野県信濃町の野尻湖遺跡群内に所在する。

長径約30m、短径約25mの範囲に、石器集中30箇所が密集する、環状ブロック群である。石器総点数は約9,000点で、器種組成は台形様石器59点、搔・削器276点、石斧60点等である。石斧が最も多く出土した遺跡で、環状ブロック群の分析では下触牛伏遺跡と並んで、常に取り上げられている。

剥片Toolは、台形様石器と搔・削器と貝殻状刃器とした剥片が多く出土している。日向林B遺跡では、素材剥片を横に用いているため台形様石器と分類しているが、大形の一部は他の遺跡のナイフ形石器と近い形態をしているものがある。調整加工は、比較的大形のものは平坦剥離が多用され、中形から小形のものにBlunting加工が多く用いられている。調整加工の方向は、左右回転させていくものが多い。

#### 横針前久保遺跡（第209図）

山梨県長坂長に所在し八ヶ岳南麓の標高800m付近に位置する。遺跡は斜面地であるため、若干の移動は想定されるが、遺物集中は石器集中10箇所が径約40mの範囲にまとまるが、環状ブロック群は呈していない。

石器総数は197点と少ないが、ナイフ形石器10点、台形状石器8点、局部磨製石斧2点、石錐4点等、器種の組成は充実している。

石器石材は、黒耀石が59%を占めている。ナイフ形石器は、縦長の剥片を素材とし基端面に打面を残すものが多く、調整加工はBlunting加工又は平坦剥離が施されている。清河寺前原遺跡で多い微細な剥離はあまりみられない。台形様石器は、折断と平坦剥離が多用されている。

#### 内堀遺跡

群馬県前橋市に所在し、他の遺跡と比べると近い距離にある。

石器群はA区とB区の2箇所から検出されており、ここではA区の石器群を検討する。

遺物総数は319点と少ないが、ナイフ形石器20点、台形様石器11点、石斧が4点出土している。石器石材は黒耀石が92%を占めている。Toolは縦長剥片を素材としたものが目立ち、ナイフ形石器の多くは、打面を基端面に残した基部加工である。台形様石器は左右端を折断したものがある。石器群の形態から編年的にやや新しくなると思われる。

以上、清河寺前原遺跡と黒耀石石器群の遺跡を概観したが、石器石材によるためか非常に似た石器群という印象を受ける。しかし、素材剥片の用い方、調整加工等は遺跡ごとに違いがあり、日向林B遺跡では、台形様石器のみでナイフ形石器は出土していない。

それぞれの石器をみると違いはあるが、清河寺前原遺跡や日向林B遺跡のように、黒耀石原産地から遠距離にありながら、黒耀石が多量に持ち込まれ、活発に剥片剥離が行われており、ナイフ形

石器・台形様石器が40~50点出土している。また、横針前久保遺跡や内堀遺跡のように遺物総数が200~300点と少ないので、ナイフ形石器・台形様石器が20~30点と高い割合で出土している。

黒耀石原産地と遠距離にある遺跡は、野尻湖遺跡群（日向林B遺跡等）を除くと、黒耀石を集中的に持ち込んでいる遺跡は、点在的にしか存在しておらず、黒耀石の流通形態を考えるのに示唆的

である。しかし、現状では清河寺前原遺跡等から持ち出されたと考えられる石器群は見つかっておらず、立体的な遺跡群の在り方は分かっていない。環状ブロック群の形成要因とともに、黒耀石が集中的に持ち込まれた遺跡の分析が重要になると考える。今後、黒耀石の産地推定分析を実施し、より詳細な検討を行うこととする。

## 参考・引用文献

- 安蒜政雄・小菅将夫・島田和高 1999 「月野遺跡群と槍先形尖頭器」『大和市史研究』第25号 大和市役所総務部情報資料室編
- 大竹幸恵他 2001 『県道男女倉長門線改良工事に伴う発掘調査報告書—鷹山遺跡群第Ⅰ遺跡および追分遺跡群発掘調査—』長門町教育委員会
- 栗島義明 1993 「環状ブロックの構成」『環状ブロック群—岩宿時代の集落の実像にせまる—』第1回岩宿フォーラム／シンポジウム
- 小菅将夫 2006 『赤城山麓の三万年前のムラ下触牛伏遺跡』泉水者
- 島田和高 2008 『氷河期の山をひらき、海をわたる—日本列島人類文化のパイオニア期—』明治大学博物館
- 島田和高 2009 「黒耀石利用のパイオニア期の環状のムラの消滅」『シンポジウム 東アジアの新人の拡散とOIS 3の日本列島』日本第四紀学会研究員会
- 大工原豊 1993 「環状ブロック群が形成された背景—離合集散の要因について—」『環状ブロック群—岩宿時代の集落の実像にせまる—』第1回岩宿フォーラム／シンポジウム
- 田代 治他 1989 『西大宮バイパスNo.5遺跡』大宮市遺跡調査会報告第24集
- 田代 治他 1995 『西大宮バイパスNo.6遺跡』大宮市遺跡調査会報告第48集
- 田代 治 1997 「大宮台地の概要」『埼玉考古別冊第5号—特集号 埼玉の旧石器時代』埼玉考古学会
- 田中英司他 1984 『明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集
- 津島秀章 2009 「集合と分散—石器原産地分析からみた中型環状ブロック群の構造—」『研究紀要27』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 土屋 積・谷 和隆 2000 『上越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 信濃町内その1—日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ッ栗遺跡・大平B遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書48
- 西井幸雄 2004 「大宮台地における石器群の変遷」『山下秀樹氏追悼考古論集』
- 西井幸雄他 2008 『大木戸遺跡I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第355集
- 橋本勝男 1989 「AT降灰以前における特殊な遺物分布の様相—いわゆる『環状ユニット』について（その1）—」『考古学ジャーナル』309
- 橋本勝男 2006 「環状ユニットと石斧の関わり」『旧石器研究』第2号 日本国石器学会
- 春成秀爾 2001 「更新世末の大形獣の絶滅と人類」『国立歴史民俗博物館研究報告』第90集 国立歴史民俗博物館
- 前原 豊 1998 「内堀遺跡群内堀遺跡」『第5回石器文化研究交流会—発表要旨—』石器文化研究会他
- 村石眞澄・小林 稔他 2000 『横針前久保遺跡・米山遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第176集